

教育講演 2 演者略歴

杉本 健樹 (すぎもと たけき)



【略歴】

1985年 高知医科大学 卒業
1989年 高知医科大学大学院修了 (医学博士)
1989年 高知医科大学附属病院 助手 (第1外科)
1990-95年 高知県立安芸病院 外科勤務
1995年 高知医科大学医学部 助手
2006年 同 講師
2007年 同 准教授
2007年 高知大学医学部附属病院 病院教授
2011年 同 臨床遺伝診療部 副部長
2015年 同 乳腺センター センター長
2016年 同 臨床遺伝診療部 部長 (併任)
2019年 同 がんゲノム医療センター センター長 (併任)

現在に至る

【資格等】

日本外科学会 外科専門医・指導医、日本乳癌学会 乳腺専門医・指導医、日本人類遺伝学会 臨床遺伝専門医、日本遺伝性腫瘍学会 遺伝性腫瘍専門医・指導医、がん治療認定医、マンモグラフィ検診認定読影医 (AS)、遺伝性腫瘍カウンセラー

2023年6月16日・17日 第29回日本遺伝性腫瘍学会学術集会 会長
高知市文化プラザ「かるぼーと」で開催予定

ゲノム情報を利用した最新の乳癌治療 — 遺伝性腫瘍とがんゲノム医療を中心に —

杉本 健樹

高知大学医学部附属病院 乳腺センター長
臨床遺伝診療部長 がんゲノム医療センター長

近年、ゲノム解析技術の急速な進歩により検査費用・時間が著しく低減・短縮され、臨床に実装可能な時代となった。がん診療でも生殖細胞・体細胞双方の遺伝子解析が行われRNA解析のtranscriptomicsや蛋白解析のproteomicsなどmulti-omicsで薬物の適応を決定する時代が到来している。

乳癌の薬物療法が他癌腫との大きく異なるのは、化学療法（細胞障害性抗がん剤）に加えエストロゲン受容体（ER）（乳癌の約2/3）を標的としたホルモン療法とHuman Epidermal Growth Factor Receptor 2（HER2）の過剰発現（15-20%）を標的とした分子標的薬が非常に効果的なことである。そのため、過去の薬物療法の開発はホルモン療法・抗HER療法耐性克服の歴史と言っても過言ではない。

しかし、ゲノム医療の普及により、新たな分子標的の探索も始まっている。中でも生殖細胞系列のBRCA1/2病的バリエーションを標的とし、DNA修復機構の2重破綻により癌の細胞死（合成致死）を誘導するPARP阻害剤の登場やトリプルネガティブ（ER, PgR, HER陰性）乳癌のPD-L1や腫瘍変異量を標的に免疫チェックポイント阻害剤の適応が拡大されたことは特筆すべきである。また、Anthracycline, Taxane系抗がん剤を超える化学療法剤の開発はなく、増量も限界に達しG-CSFの進化を背景に投与間隔を縮め用量強度を高めるdose dense療法が普及する一方、ER陽性HER2陰性乳癌への過剰な化学療法を回避するためにRT-PCRで遺伝子発現解析を行い化学療法の効果を予測するOncotype DX[®]も普及した。効果が期待できる適正な対象を選び出し、支持療法を充実してより効果の高い化学療法を提供する時代になったのである。

これらの最新の医療を普及させてすべての乳癌患者に適正に提供するためにはがん医療と同様に遺伝（子）医療の均霑化が必要となる。高知県でわれわれが10年に渡り取り組んできた遺伝性腫瘍診療ネットワークの構築を紹介し、各地域でのがんゲノムや遺伝性腫瘍診療の均霑化の参考になれば幸いである。